様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　　5 月　28 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：　２００８～２０１１
課題番号：　２０５２０２８７
研究課題名（和文）　ポール・ヴァレリーにおける官能性の詩学

研究課題名（英文）　Paul Valéry or the poetic of the sensuality

研究代表者
松田浩則（MATSUDA HIRONORI）
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：00219445

研究成果の概要（和文）：
ポール・ヴァレリーの晩年における作家活動を、彼がジャン・ヴォワリエにささげた二冊の詩集『コロナ』『コロニラ』や彼女に送った 600 通を越える手紙（フランス国立図書館所蔵）などを通して明らかにすることができた。また、未完に終わった『わがファウスト』の草稿研究（とりわけ、その第四幕の草稿研究）などを通して、ヴァレリーが書くこととエロスとの密接な関係を探求していたことも明らかにした。さらに、『コロナ / コロニラ』（みすず書房）および『わがファウスト』（『ヴァレリー集成』第 6 巻収録、筑摩書房）を翻訳し、これまでとは違った観点ないし角度からヴァレリーの作品を一般読者が発見することを可能にした。

研究成果の概要（英文）：
I clarified the works of the last years of Paul Valéry in studying especially “Corona” and “Coronilla” , two collections of poems dedicated to Jean Voilier and more than 600 letters written to her. I studied also his drama “Mon Faust” with its manuscript and clarified the importance of the 4th act of “Lust”. Those studies made me possible to emphasize the close relation between the writing and the eroticism. On the other hand, I translated “Corona / Coronilla” (Misuzu shobô) and “Mon Faust” (Chikuma shobô) in Japanese. These translations will help Japanese readers find Paul Valéry’s works in a new light.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学、ヨーロッパ文学
キーワード：仏文学、ヴァレリー、詩学、官能性

１．研究開始当初の背景

（１）ポール・ヴァレリーの最晩年の愛人ジャン・ヴォワリエに関しては、ヴァレリーの演劇作品『わがファウスト』の制作におおいに影響を与えたことが知られていたにもかかわらず、実際に二人の間でどのような意見の交換や討議がなされていたのかといった肝心の点に関しては、まったく知られていな

い状況にあった。
　また、フランス国立図書館に所蔵されているものの、詳細な研究のされていない『わがファウスト』の草稿、特に、その第四幕に関する研究が、従来のヴァレリー像を根本的に更新する可能性があることが夙に指摘されていたにもかかわらず、手つかずの状態にあった。これは、ネッド・バステ（ニース大学名誉教授）が 1970 年代におこなった先駆的研究に学会全体が満足していたところに最大の原因があると思われるが、松田はこの大家による研究に、大きな過ちがいくつか含まれることに気づき、それを修正する必要性を感じていた。

（２）ヴァレリーがヴォワリエにささげた二冊の詩集『コロナ』と『コロニラ』が、ヴァレリーの死後 60 年以上もたって本国フランスで出版された(Éditions de Fallois, 2008)。しかし、この詩集は、編集方針が不明なばかりでなく、収録された作品の選択や配列順序などにも、ヴァレリーの意向がどれだけ反映されているのか疑問が残ったために、研究書としては使えないものと判断された。それで、二つの詩集の改訂版のようなものを作成する必要性が指摘されていた。また、こうした作業を完璧なものにするためには、フランス国立図書館に所蔵されているヴァレリーとヴォワリエとの間で交わされた書簡の研究が不可欠なものと思われた。

（３）『コロナ』『コロニラ』『わがファウスト』というヴァレリー最晩年の作品群を一括して捉えなおすことによって、これまで考えられていたものとは違ったポール・ヴァレリー像が現出してくるとの思いが松田には強かったが、ヴォワリエに送られたヴァレリーの書簡ならびに詩編が、プライバシー保護の観点から、いっさい公開されていないという状況が長年続いていたために、本格的な研究がされないままであった。４年ほど前に、ヴァレリーの著作権所有者たちによって、初めてそれらの資料の閲覧が可能とされ、新たな研究の可能性が開かれた。

２．研究の目的

　ヴァレリー最晩年の作品群には、従来のヴァレリー像を書き換えるに値するさまざまな要素が含まれている。特に、官能性あるいはエロティシズムの面からヴァレリーの作品を捉えなおすことによって、知的絶対主義の面ばかりに焦点があてられていた感のあるヴァレリー研究を刷新する必要性があった。
　とりわけ、ヴァレリーを地中海的な明晰な知性の持ち主とのみ理解する傾向の強かった日本においては、小林秀雄をはじめとして、ヴァレリーの初期作品、とくに「ムッシュー・テスト」系列の作品を重視する態度が顕著であった。ヴァレリーにおいては、もちろんこうした知性主義、さらには、知的絶対主義があることは明白であるものの、その一方で、その知性を根底から揺るがすエロティシズムにたいする配慮こそが、ヴァレリーの作品、さらには、その三万ページにも及ぼうとする『カイエ』の執筆動機となっていることを忘れてはならない。いわば、ヴァレリーにおいては、知性とエロスの絶えざる不均衡こそがその思考、エクリチュールの根本にあることを示すかたちで研究がなされる必要がある。
　その意味で、ヴァレリー晩年の作品『コロナ』『コロニラ』『わがファウスト』は、ヴァレリーみずからが自分の活動を貫いてきた知的絶対主義に疑問を投げかけた作品であり、その精密な研究はきわめて意義が大きいと判断される。

３．研究の方法

　フランスの国立図書館に所蔵されている『わがファウスト』の草稿の研究が、まず焦眉の急であった。とくに先述したその「ルスト」第四幕の草稿研究がきわめて重要なものと感じられたので、松田は数次にわたって現地に赴き、草稿を正確に筆写するとともに、詳細な注を付しつつ翻訳をおこなった。これは、ネッド・バステの過ちを訂正し、新たな第四幕の読みを今後に開くことのできるものと確信している。
　さらに、『わがファウスト』の「孤独者」第二幕、第三幕に関連する草稿も、筆写し、その主な草稿を翻訳することができた。これは、世界でも初めての試みのはずである。
　他方、フランスで出版されたばかりのヴァレリー最後の詩集『コロナ』と『コロニラ』に正確さを欠くところがあったので、まずこれの原稿をフランス国立図書館で確認し、訂正するとともに、同図書館に所蔵されているヴァレリーとジャン・ヴォワリエ間の往復書簡を研究し、詩集成立にいたる事情を明らかにした。
　このように作業を並行的に進めることによって、ヴァレリーにおいて、『わがファウスト』の執筆作業と、『コロナ』『コロニラ』の執筆作業がおおいに関連しあっていることを示すことができた。
　また、『コロナ』『コロニラ』の研究に関しては、慶応義塾大学の研究者たちと興味深い意見の交換をしながら、研究の精度を高めることができた。このような過程を通して、ヴァレリー最晩年の作品群において、いかに知

性とともに、官能性が大きな役割をはたしているのかが明らかになったものと思う。
　また、ヴァレリー晩年の活動を明らかにするために、上記の作品群に加えて、同じくヴォワリエにささげられた『ナルシス交声曲』や『カイエ』も同時に研究して、ヴァレリーの活動全体を分析した。
　研究方法としては、資料の収集からその分析・統合にいたるまで、実証的な方法を旨とした。とりわけ、『わがファウスト』「ルスト」第四幕の資料や「孤独者」第二幕、第三幕の資料、そしてヴァレリーからヴォワリエへの手紙などの資料は、きわめて錯綜しているばかりでなく、フランス国立図書館の整理・分類に若干の問題があったため、困難が伴ったが、ほぼ完璧なかたちで読み取ることができたものと思う。

４．研究成果

（１）『コロナ』と『コロニラ』に関する論考は日本はもとよりフランスでも皆無という状況だったが、これに関して数本の論文をまとめ、東京大学仏語仏文学研究会紀要や日本ヴァレリー研究センター紀要などに成果を発表することができた。
　とりわけ、日本ヴァレリー研究センターに発表した「ヴァレリーあるいは『愛の子ども』」において、「ルスト」第四幕でヴァレリーがしばしば言及する「子ども」の意味を解明した。それは、端的に言えば、ヴァレリーとヴォワリエとの間には生まれえない子どもの代わりに、音楽で言う「倍音」と化した二人の存在が、あらゆる差異を越え、共鳴・共感から生み出す作品としての子どもであると考えられる。それは、通常、愛する二人が到達点として考えるところを出発点として、あらたな生の可能性を探る地点でもあると考えられる。そしてそれは、ヴァレリーが青年時に書いた『ムッシュー・テストと劇場で』(1896) でテストに語らせた、「ひとりの人間に何ができるか？」「人間に何ができるか？」という二つの質問にたいする返答となっていることも同時に明らかにした。

（２）さらに、以上の研究をふまえて、詩集『コロナ/コロニラ』を精神科医の中井久夫氏との共訳の形で翻訳出版することができた（みすず書房、2010 年)。これは、本国フランスで出版された詩集のミスを正し、よりヴァレリーの意図に沿った編集方針をとった訳詩集となっている。この詩集は、これまで『若きパルク』(1917) や『魅惑』(1922) といったサンボリズムの影響の濃厚な詩集に慣れていた日本の読者層に、人生の黄昏時に歌われた「優しい」詩を提出したという意味で、新たなヴァレリー像が今後描き出される可能性を提出できたのではないかと思われる。

（３）『ヴァレリー集成』第５巻（筑摩書房）に、論考「『カイエ』におけるヴァレリーのデッサン」を発表した。これは、ヴァレリーの『カイエ』に見られるデッサンを主題別に分類わけしたうえで、それぞれのデッサンがどのような状況で生まれたのか、それらのデッサンから何が読み取れるのかを明らかにした、他に類例を見ない研究となっているはずである。とりわけ、「手」「蛇」「船」などのデッサンに関わる研究は、本研究のテーマとしているヴァレリーの晩年におけるエクリチュールとエロスとの密接なつながりを明らかにすることに寄与したものと思われる。すなわち、『わがファウスト』第二幕では、ファウストとルストとの間で手による接触がなされ、これを機に、二人の存在間の距離が一気に縮まる場面があるが、こうした手と触覚（接触）のもつ問題系を詳細に明らかにした。また、その名前自体が「帆船」を意味するヴォワリエにたいして、ヴァレリーが船の絵を書き送ることの意義も明らかにした。すなわち、今、ここにいない不在の存在を喚起し、現出させる手立てとしての機能をこの「船」のデッサンが持っていることを明らかにした。また、「蛇」のデッサンは、ヴァレリーのエロスの表現に頻繁に同伴するが、ヴァレリーとヴォワリエがいわば二つの頭を持った一匹の蛇といった神話的な蛇に変容するような契機がヴァレリーの作品に何度か見られること、また、お互いがお互いの尾を噛むウロボロス的蛇に変身する場面が見られることもあわせて指摘した、

（４）『ヴァレリー集成』第６巻（筑摩書房）に『わがファウスト』の新訳を発表することができた。これには、本邦初訳の「ルスト」第四幕草稿や「孤独者」草稿を加えるとともに、新資料研究の成果を生かした論考「『わがファウスト』あるいは双頭の蛇」を付した。このなかで、『わがファウスト』を構成する趣の異なった二つの作品「ルスト」と「孤独者」とを結ぶ創作原理が何なのかを問い、「知性（ヌース)」と「エロス」という二つの契機の一体化、「二人で一人」、「一人で二人」というヴァレリー的な他者理解の究極の表現をそこに見ることができると主張した。こうして神話的な蛇ウロボロスをかたどるような作品を作ることが、ヴァレリーのエロスの最終的な表現であったことを明らかにした。さらに、そうした二匹の蛇が、互いの尾を噛み合う構造をしつつ、たえざる不均衡の状態にある「知性」と「エロス」の関係にもなっていることを指摘した。

（５）慶応義塾大学出版局刊行の「三田文学」（第 102 号、2010 年 8 月）誌上で、清水徹氏、田上竜也氏と鼎談し、『コロナ』『コロニラ』のもつ意義を明らかにするとともに、ヴァレリーにおける書くこととエロスとの密接な関係を議論した。またこのような鼎談のかたちをとることで、比較的広い読者層に向かって研究の成果を発表することができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）（総計 3 件）

①松田浩則「ヴァレリーあるいは『愛の子ども』」、『ヴァレリー研究』第５巻、日本ヴァ、レリー研究センター、2009 年 5 月、pp. 9-32.

〔学会発表〕（計 2 件）
①松田浩則「ヴァレリーと『コロニラ』」、慶応義塾大学仏語仏文学研究会、慶応義塾大学、2009 年 11 月 28 日。

②松田浩則「ヴァレリーとナルキッサ」、日本ヴァレリー研究センター、青山学院大学 2008 年 5 月 25 日。

〔図書〕（計 4 件）
①ポール・ヴァレリー『ヴァレリー集成』第 6 巻（筑摩書房）、2012 年夏刊行予定）。松田浩則、恒川邦夫監訳。松田はここで『わがファウスト』の新しい訳を提出するとともに、解題を兼ねた論文「『わがファウスト』あるいは双頭の蛇」を執筆した。「ルスト」第四幕、「孤独者」第二幕、第三幕の翻訳に関しては、初の日本語訳である。

②ポール・ヴァレリー『ヴァレリー集成』第 5 巻（筑摩書房、2012 年 2 月）。松田浩則はこれに論考「『カイエ』におけるヴァレリーのデッサン」（pp. 419-463）を付した。

③ポール・ヴァレリー『コロナ/コロニラ』(みすず書房、松田浩則、中井久夫訳、2010 年６月)。松田はこれに論考「ヴァレリーあるいは黄昏時の優しさ」（pp. 7-38.）を付した。

④ドニ・ベルトレ『ポール・ヴァレリー　1871－1945』(法政大学出版局、2008 年 11 月。松田浩則単独訳)。松田は翻訳だけでなく、これに「人命解説・索引」pp. 1-61. を付した。

６．研究組織
(1)研究代表者
松田浩則（MATSUDA HIRONORI）
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：00219445